

介護現場の民俗誌

— 「呼び寄せ型」の人たちを中心に —

大城博美 *

OSHIRO Hiromi

Documenting the Folklore of Nursing Care Sites

Focusing on the People of the “Called-for Type”

In folklore thus far, while elderly informants have been indispensable, elderly persons who require nursing care have been missing due to inability to “narrate” for themselves. The purpose here is to describe the situation of these elderly people as they carry on their daily lives in short-term nursing facilities. I especially wish to focus on people known in this paper as the “called-for type.” These are elderly people who have been asked to move to the residential location of their children who live in cities, and who are living out their old age in places other than where they were born and brought up or in which they are used to living. In contrast, the “community-attached type” refers to elderly people who continue to live out their old age in places where they were born and brought up or in which they are used to living. These two different types of people each have their own characteristic ambience. The “called-for type” elderly pay more attention to the aspect of creating a place in which to feel comfortable than their physical nursing care.

The short-term nursing facilities to which the elderly move their daily lives are indeed “ordinary” in the sense that they support daily life itself, but the temporary locale of such facilities also carries the dual significance of an “non-ordinary space” to which elderly persons move from their home.

キーワード：介護 ショートステイ 「呼び寄せ型」 「地域密着型」

はじめに

筆者が地元沖縄で市史編纂の為に調査をしていると、インフォーマントになってくれそうなお年寄りが日中自宅を訪ねても見つからないという経験をした。お年寄りはどこに居るのだろうか。

* 日本民俗学会会員

足腰も丈夫でまさに元気な人たちは畑仕事に精を出していたり、比較的元気な人たちは、デイサービスを利用していたり、更に介護を要するようになった人たちは介護施設に入所していたりということで、地域から「日中、お年寄りが消える」という現象に遭遇した。渋谷研が問題提起をした「その後の人たち」[渋谷 2001]、つまり「情報提供者にも伝承実践者にもなり得ない（なりにくい）」[渋谷 2001: 412] ような介護を必要とする老人たちについて、民俗学では正面から対峙することなく一足飛びに死者儀礼へと視点を移してきたのではないだろうか。つまり、これまでの民俗学研究において介護を要する老人たちの姿が、抜け落ちてしまっていたのではないだろうか。

そこで、超高齢社会を目前にし介護を切実な社会問題として抱え込もうとしている現在、試みの一つとして介護現場の民俗誌としてショートステイという介護現場での定点観測的参与観察を通して見た、「介護現場の今」を描写していく。

1. これまでの「老人」像

民俗学がこれまで老人たちを描いてきた姿とは、人生儀礼における長寿儀礼の研究対象としてであったり[比嘉 2000; 板橋 2000]、隠居制のある地域における姿であったり[関沢 2003]、宮座など祭りにおける長老衆研究など[関沢 1997; 板井 2001]、元気に生活する老人たちの姿が中心であった。

平均寿命が 80 歳を超える超高齢社会を迎えたために、「人生 50 年時代」であれば経験する暇すらなかったであろう、病いや障害を抱えて予想外に長い死までの時間をどのように生きていけばいいのか、まだ日本という社会はそのモデルを獲得し得ておらず、介護も社会問題としての文脈で捉えられる傾向にある。

民俗学では、「古い」に積極的意味合いを見出そうと公開シンポジウム「古い—その豊かさを求めて—」⁽¹⁾などが行われ、その成果を『老熟の力—豊かなく古い』を求めて』[宮田ほか編 2000]としてまとめるなど、積極的に老いについての発言を始めた。しかしながら、そこで提示されたカミや祖霊に近い聖性を帯びた存在としての高齢者、知恵にあふれた敬うべき存在として家族や地域社会において受容されてきた老熟した人々を日常生活の中で見出すことや、経験知や体験知を蓄えた高齢者がそれを還元することの出来る場所を見出すことは困難になりつつあるのが、今の日本の姿であると言えないだろうか。

松崎憲三は「ポックリ信仰」の一連の研究を通して、介護を実践している人たちや、介護が必要になる一歩手前の人たちが、「ポックリ往生」を願っており、それらの人々の姿から「介護される者とする者の存在、そして両者の切実な思い、これがポックリ（コロリ）信仰隆盛の要因に他ならない。」[松崎 2004: 32]としている。ポックリ信仰とは「健康で長生きし、万一病気になったとしても長患いせず、しもの世話にならずに安らかに往生を遂げたい、という心境に基づく信仰」[松崎 2007: 14]とされるもので、昨今福祉の世界などで聞かれる PPK（ピンピンコロリ）に相通ずるものであるが、その根底に流れているのは「ひとさまに下の世話をかけたくない」という、ひと（特に身内）に自分の面倒をかけてしまうことへの忌避感である。

倉石あつ子は「嫁のつとめ—看護と看取り—」[倉石 2000]で、介護保険が施行される以前、家族の中で老いる両親を誰が看るかということで葛藤する家族の姿を「嫁のつとめ」をキーワードに描いている。

このように、介護を受けることへの不安から発生する信仰や、家族の誰かに介護が必要になった時の家庭内における葛藤の様子など、介護をめぐる事象への着目も少ないながら出てきている。

しかし、まだ介護施設という集約的に介護を行っている現場における民俗誌的記述、特に実際に誰かの介護を受けながら日常生活を送る人々の姿が見えていない。そこで、本稿では日常生活そのものが介護という誰かの介助を受けることで成り立っている人たちの姿、特にショートステイという生活の場でありながら「かりそめの場」であり、「日常」と「非日常」の意味合いの混交した場における介護の意味について考察していく。

2. 介護の実際

(1) 「同居」と「別居」と「呼び寄せ老人」

老親と子との関係を「親子関係の病理」として社会的に考察した増田光吉によると、「同居の形態は、子どもの結婚当初からの同居、すなわち（親の立場からすれば）「生涯型同居」と、子どもが結婚したときには一時的に別居して、親が晩年になってから同居する「晩年型同居」にわかれていくと考えられる」[増田 1980: 129-130]としているが、この論考の中では「呼び寄せ老人」という用語はまだ使われていない。また、独居老人についての1973年に実施された調査では、「将来において同居の計画をもつ者が4割近く見られた」とし「晩年型同居」の増加を予想している。その調査から5年後の1978年に追跡調査を行った結果では、「独居継続者は48%、子どもの同居へ移った者19%」となっており、子どもの同居が増えたことが確認されている[増田 1980: 139]。

増田が指摘している「晩年型同居（近居）」というものの実態は、1980年代後半以降マスコミによって注目され命名されたとされる、「呼び寄せ老人」⁽²⁾といわれる新たな高齢者の姿として我々の前にたち現われてきた。

「呼び寄せ型」（本稿においては「呼び寄せ老人」についてこのように表記していく）とは都市部に居住する子のもとに呼び寄せられ同居を始める高齢者のことである。その最大の特徴は自分自身の馴染みの環境ではないところで老いを生きているということである。つまり、何らかのきっかけで子どもが親のことを「これ以上、一人で生活させていられない」などの理由で、子の生活拠点に招き入れるのである。そこは、子の生活拠点ではあっても、親自身のそれまでの生活拠点ではないために新しい環境での新たな生活を始めていかなければならない。自分の家族以外に友人・知人が居ないかもしれない状況という点が特徴である。

一方、本稿で「地域密着型」と呼ぶのは、自分自身の生まれ育った地域あるいは家庭を持つなどして長年にわたり生活してきた馴染みの地域において、老年期である現在も生活を続けている人たちのことである。つまり、自分自身の友人・知人をはじめ、地縁・血縁などが比較的近くに居る人々ということであり、そこが「呼び寄せ型」と「地域密着型」の人々の最大の違いである。

人間にとっての居住地とは「機能的側面」と「帰属的側面」としてとらえることが出来る。「機能的側面」とは生活に対応した利便性や安全性など、一定程度の指標化が可能で、交換価値を有するものである。一方「帰属的側面」としての居住地とは、その個人にとっての居住地の意味であり、「私が働いてきた地域」といった側面であり、客観的指標化が困難で交換価値も持たない」とされている[鈴木 1999: 31-32]。

「呼び寄せ型」の人は、本人と家族にとっての安心のために家族との同居を選択はしていても、顔見知り家族だけという状況になってしまい、家に閉じこもりがちになりやすい。また、家族にとっては気軽に介護の援助を頼める地縁・血縁もないため孤立しやすい。その反面、ムラ的社会の場合に世間の目が気になって利用しにくいとされる⁽³⁾、介護サービスなどを活用することへの抵抗感が少なく公的資源などを利用しやすい状況であるとも考えられる。

「機能的側面」としての生活の安全性や利便性などは家族との同居を選択することである程度保障されるであろう。しかし、新たな地における「帰属的側面」つまり、自分自身の知り合い作りや、自分自身にとってのかけがえのない場所としていくための努力が必要となってくる。そのような視点からの支援の充実の必要性などについても認識され、新たな高齢者サポートの需要の一つとなっている⁽⁴⁾。

（２）「ショートステイ」という場の特徴について

ショートステイとは、在宅にて生活しながら（在宅にて介護を受けながら）、時折「施設」での介護を受けるために利用することのできる場である。主に介護をしている人たちの体調不良や休息、気晴らしといった、介護をしている人の都合により利用されるため、利用する本人が楽しみにすることも多いデイサービスと違った意味合いを持ってくる。また、特別養護老人ホームや老人保健施設のような入居施設とも違い一時的な入居施設であるため、「施設に慣れた頃には、家に帰る」ということを繰り返す。そのため、利用する立場から見れば、不安定なかりそめの生活の場であると言える。

介護保険は「利用者本位」「高齢者の自立支援」「利用者の選択・自己決定」を基本理念としているものの、実際の介護計画などは家族の意向を受けて計画が立てられている場合が少なくない。利用者本人が全く関与しないというのではなく、利用する当人は「家族に迷惑をかけなければ」といった思いがあるのが現実である。

多くの認知症の人たちと接してきた大井玄は様々な文献やアンケート結果を参照し、日米における認知能力の低下を怖れる理由には差異があると述べている。日本の場合は圧倒的に「他者」に迷惑をかけることを怖れるのであり、アメリカ人の場合は自己の自立性が失われるために恐怖する、としている。そこから、大井は「常に他者（特に身内の者）の存在を意識しているか、あるいは一つの独立した「宇宙」として自己を自覚しているか」という自己観についてヘーゼル・マーカスとシノブ・キタヤマを援用し、前者を「つながりの自己観」後者を「アトム的自己観」と呼び変え〔大井 2008: 184〕、日本人は「つながり」の中で生きている存在として自己を認識しているとしている。そのため、「つながり」の中で生きている人にとって、自分自身のことよりも、周りの人々へ迷惑・面倒をかけることをおそれるようになってしまおうとしている。

ショートステイという現場で出会う利用者の多くは、そのような「つながりの自己観」とも言える存在として、同居し世話になっている家族の意向に沿うようなかたちで、自身の生活を送ることを余儀なくされていると言える。

3. 「ショートステイA」

(1) 「ショートステイA」

ショートステイA⁵⁾は関東のA市という、市街化区域と農村地帯が混在する地域にある。A市全体の高齢化率は15.5%であり、Aのある地区の高齢化率は19.2%と市全体の平均よりは高くなっている。介護保険の認定率は16.1%で市内では高い地区であり、介護保険サービス事業者は比較的多くある地区である[A市2009]。

Aのある地区は高齢化率が高いもののAの利用者がすぐに集まったわけではなかった。開設後3年ほどは様子見期間で、地元の人たちは目の前にある施設をほとんど利用せず、遠方に住んでいる利用者を迎えに行くという「ドーナツ化現象」と呼べる現実が待っていた。その傾向はショートステイの開設より8年程前に開設したデイサービスの場合にも見られたもので、利用者の確保には苦労したという。事業開始に向けて役所を訪れた際にAの施設長は役所の職員から「こちらの人は、ショートステイは遠くを利用したがるんですよ」と言われたという。それは、「介護を提供してもらうことは全てをさらけ出すということが必要になって来る、そのことが抵抗になっているようだ」と施設長は分析している。

(2) 「ショートステイを利用する人たち」の姿

ショートステイAを利用する人々を利用の形態から3つのタイプに分類することが出来る。1つは「定期的に利用する」タイプ、そして「不定期に利用する」タイプである。さらにもう1つのタイプは施設への入所を待つ間の「つなぎ」的役割としての長期でのショートステイの利用の仕方である。

定期的に利用する場合は、各人のリズムが月単位や、週単位等で出来てくるために現場で働くスタッフにとっては対応しやすくなって来る。また、本人にもリズムとして「週末はAに行く」というものが出来ていることもあり、滞在中も穏やかな時間を過ごすことが可能となる。一方、家族の介護疲れなど「家族の都合」のために不定期にショートステイを利用する場合には入所する本人が納得していないこともあり、帰宅願望が強くみられることがある。更に、長期でのショートステイ利用の場合、本人が入所を納得している場合は比較的穏やかに過ごしているように見える場合もある。しかし、入所の理由が納得出来ない人や、長期に及んでしまうために途中で帰宅願望も強くなり、気分の落ち込みなど感情の起伏も激しくなることがあり、滞在中、利用者本人をはじめ、その対応に苦慮するスタッフや家族が困難に直面することがある。

ショートステイを利用する人たちの特徴を一言で説明するなら「「生活」の場を移動する人々」ということが出来る。長期利用者を除くと、定期的に家とショートステイ先の施設という「生活の場」を移動しているということが大きな特徴として指摘することができる。さらに利用の目的も、「自分自身の楽しみのため」に希望してショートステイを利用するということよりも、「介護している家族の都合のため」というのがキーワードとしてある。つまり、極めて単純化して言うと、ショートステイという場は、介護を受ける本人からしてみると「洗々、家族のために時折入所する・させられる場所」と言うことが可能である。

そのことは、Aの利用者数の変動を見てもうかがえる。利用者数は年間を通して一定ではなく、

定員 20 人に対して、2009 年の 8 月を例にとると月間の延べ利用者数が 41 人であり、1 日当たり 10 人程度の利用者数である。一方、5 月や 9 月の連休シーズンは農家の人たちにとっては繁忙期であり、その他の人にとっては行楽シーズンということもあり、利用者数は増加する傾向がある。

4. Aにおける「呼び寄せ型」の人たち

（1）Aにおける空間的配置

A は、当初ユニットケアを想定して作られたということで、全室個室で約 10 部屋を 1 ユニットと見立てた作りになっており、リビング、キッチン、浴室などが配置されている。それを反転させたようなかたちで同じユニットがもう 1 つある。出入り口に近くスタッフ詰所のある、手前の方のユニットでは、いつでもスタッフがいるため目が届きやすい。そのため要介護度が高く介助がより多く必要な人たちが、日中過ごすことが多い。A において要介護度が高いのは自分自身の出身地や、これまでの生活の大半を過ごしてきた馴染みの地域で老いを生きている「地域密着型」の人に比較的多い。このことは、いつどのような時点で介護サービスを利用するかという点とも関係があると思われる。

一方、比較的自立している人は奥のリビングにて過ごすことになる。要介護度が低く比較的自立している人の多くはいわゆる「呼び寄せ型」の人が多くなっている。そのため、手前と奥のリビングでは、異なった空気が醸し出されている。

（2）「呼び寄せ型」の人たちの事例

事例 1) A さん 90 代

四国に生まれ育ち地元の人と結婚後、東北にて所帯を持ち暮らしてきた。夫が認知症のため自宅での介護を断念し有料老人ホームに世話になることになった。そのため A さんが一人暮らしになってしまうことを心配し、「とりあえず、しばらく来てはどうか」との娘からの提案で A 市に住む娘夫婦の家での同居生活が始まったのが 10 年ほど前である。

A の利用は月に 1～2 回程度で、1 回につき 3～4 泊していく。歩行をはじめ生活のほとんどは自立しており、薬の管理も本人が行っている。

専業主婦として家庭を守り、4 人の子どもを育てあげた。子どもの PTA 活動や趣味の活動などを通じて友人を得た。子育てが一段落ついてからは仲の良い女友達との旅行が毎年恒例となっており、夫も快く送り出してくれた。

年相応の物忘れはあるものの、認知症などの症状は無く好き嫌いもはっきりしており、主体的に生きているという印象を受ける。しかしながら、ショートステイの利用に関しては「娘の都合だから、私が決めることは出来ないのよ」と、A において知り合い仲良くなった他の利用者との利用時期がズレてしまい、会えない時に残念がる姿がみられる。一方、週 2 回通っているデイサービスの利用は曜日が固定しており、行事などが予定されている時には「ショートステイではなくて、デイサービスに行きたいから」ということで、ショートステイの利用の際の日程調整は要求している。しかしながら、「ショートステイに行きたい」「〇〇さんと同時期に利用したい」という自発的な希望によりショートステイを利用しているわけではな

い。

リビングにて過ごしている場合には、初めて見かける人とも話をするなど積極的に人とのコミュニケーションをとろうとする姿勢が見られる。

Aさんの親世代の最期について聞いた時も「親の時は長くは寝付かずに亡くなった」。「でも、今はね、違うから」と自身の親世代の老年期と、自分自身が生きている現在の老年期とでは状況が違うことを認識している。前例(モデル)なき時代の「長い老後」および「長い介護期間」を生きている。

娘からは「自分だったら、絶対にこんな施設(ショートステイなど)には入りたくない」と言われている。しかしAさんは「内心では「自分は親を入れておいて、見ていなさいあなた自身の老後」と娘に対して思っている」と話していた。このように、冷静に自分の置かれた現実をとらえている。

事例2) Bさん 80代

関東出身。移動の際には歩行器を使用しているが、基本的には自立している。

幼少期は父の仕事の都合でよく引越しをしていた。教員の職に就き定年まで勤め上げた。夫とは早くに死別し、長い間一人暮らしをしていた。定年退職後も一人暮らしをし、旅行を楽しむなど、1人の生活を楽しんできた。脳梗塞により足が不自由になったことを機に、A市に住む娘夫婦のもとに呼び寄せられ生活している。ショートステイの利用は定期的。

テレビを持参し、日中の大半を自室に設置したテレビを見て過ごしたり絵を描くなどして過ごしている。耳が少し遠いため、リビングで過ごす時間でも他の利用者との会話はあまり見られない。入浴介助などでスタッフとマンツーマンになると、昔の話をよくする。「元気な頃は、1人でよく温泉とか旅行に行ったものよ」が口癖。1人の時間を充実させてきた人である。

事例3) Cさん 90代

関西出身、数年前からA市の娘夫婦と同居。持病の為に身体を自由に動かすことが困難であり、車いすで移動している。Aの利用は定期的で週2泊のリズムができています。日中のほとんどの時間を奥のリビングで、ぬり絵や脳トレ問題に取り組むなどして過ごしている。リビングに他の利用者が居てテレビを見るなどしていても、あまり話しかけることは無く、1人で黙々と作業に取り組む。集団で行うレクなどには興味がなく、ほとんど参加しない。

体調の良い時にはスタッフとじっくりと話をすることもあり、そのような時に「お父ちゃんと一緒に頑張ってる店を持ったからその店のある〇〇に帰りたい」ともらすこともある。娘の方は予想以上に長く続いている親の介護生活に疲れが見られ、担当ケアマネに弱音を吐くなどしているため、ショートステイの利用回数や利用日程を長くするなどの工夫を始め、介護負担の更なる軽減を図るようにしてきた。

(3) Aで見られる「呼び寄せ型」の特徴

Aにおいてみられる「呼び寄せ型」の人の第一の特徴として、「言葉」が比較的聞き取りやすい標準語や強すぎない方言を話す人が多く、比較的しっかりしている人が多いため、意思の疎通は容易である。スタッフは身体的介護ということよりも「居場所」作りとしての側面に特に気を

配る。つまり、リビングにて過ごしている利用者同士の会話の橋渡しや、A での過ごし方への配慮、話し相手としての役割などである。

スタッフ同士での会話の中でも、「呼び寄せ型」の人と接する時のことを、「失礼があってはいけない」「ちゃんとしなくちゃ」「変な汗をかく」と表現されるように、ある種の「緊張感」をもって接していることがわかる。

その理由の1つとして、「呼び寄せ型」の人たちからは、「凛としている」とでも表現できるような、それぞれが自立した人との印象を受ける。その印象は、認知症の症状が少し出ている人の場合でも同じである。一方の「地域密着型」の人の場合、単純化してしまうと朴訥な人が多く、スタッフもあまり肩肘張らずに接することができる。

また、リビングに居て他の利用者など複数人で話をする際、「呼び寄せ型」の人の場合は、「うちの場合は～」「私の地域では～」という前置きを置いた上で自分自身の場合について語るという場面によく出会う。他の利用者との会話において、自分がこれまで行ってきた方法や習慣が他の人の場合とは違うかもしれないということまで配慮し、多様な現実へ細心の注意を払いながら、他者とコミュニケーションをとっているということである。

「呼び寄せ型」の人たちの場合デイサービスやショートステイといった介護施設を利用する際、そこに知り合いが居るということはほぼ有り得ない。しかし「地域密着型」の人たちの場合は、直接の知り合いをはじめ、少し話していると「遠い親戚」であることが判明することがあるなど「世間は狭いね」を実感することがある。

事例のAさんのように、ショートステイにおいてもデイサービスにおいても積極的に周囲の人と関わりを持ち、その時々を楽しむコミュニケーションの術を駆使して、それまで自分自身にとっての馴染みの場でなかった地域において、新たな知り合いを作る努力を続けている人もいる。その一方で、ショートステイにおいても自分の部屋に引きこもりあまり他の人との接触を好まない人や、リビングに居ても必要最低限の会話以外は持とうとしない人もいる。しかし、ほとんどの人たちが、スタッフとマンツーマンになる機会があると、昔の話や家族のことなどを話し出す。

「呼び寄せ型」の人々は、専業主婦としてPTA活動や趣味の活動を通して獲得的な社会関係を形成してきたり、商売をするなどして社会に居場所を獲得すべく積極的に活動してきた人などである。つまり、かつてのような地縁や血縁といった関係が強固にあるようなムラ社会的な環境ではなく、自分自身の意思によって何らかの目的で集まる集団としての「社縁」⁽⁶⁾を大事に生きてきた人たちであると言える。そのような生活歴の相違が老年期を迎えて介護施設においても「違う雰囲気」として感じられる要因の1つと考えることができる。

ムラの社会の中での比較的均質的な生活を送ってきた人たちではなく、まさに多様な生活を送ってきた人が都市において終の棲家としての居場所を模索しているのである。その人たちに時折居場所を提供しているのが、このようなショートステイなどの介護の現場なのである。特に今回見てきた事例のように「呼び寄せ型」の人の場合、高齢期になって移動してきた地域にて生活しているため、家族以外の人との接点となる介護の現場は特に貴重な場所といえる。

まとめにかえて

介護現場での経験をまとめた『介護はプロに、家族は愛を。』[石川 2000] という本がある。その本の中で石川は、排泄・入浴・食事などは「介護行為」とであると位置づけ、その領域をきち

んと明確化し必要になれば介護サービスを受けられるようにすることで、家族は「家族なんだから」という重圧から抜け出すことが可能であるとしている。その上で「他人ではできない家族だからこそ」の心の拠り所の関係を維持できるとしている [石川 2000: 198]。そこから著書のタイトルである「介護はプロに、家族は愛を」と掲げている。

日常生活は単調であり刺激も欠きそこに意味を見出すことが難しくなる。しかしその日常生活の演出を介護のプロの手に委託した場合、そこには介護を受けていた当人とその家族に新たな関係、もしくは忘れかけていた関係性が作り出される可能性が出てくる。新しい関係性とも言えるような距離の取り方の形成に一役かっているのが、今回紹介したような介護施設であり、慢性的な人手不足にあえぐ昨今の高齢者介護の現場である。

在宅で介護を受けて生活している人にとって、時折やってきて数日から数週間過ごすショートステイでの生活は、「非日常」としての意味付けがなされる可能性もある。日常生活のほとんどを閉じた家の中だけで、もしくは自室のみで送っているような人にとっては、「家族」以外の人と会う機会は新鮮であり、「いつもと違う」状況ということになる。自宅のドアからショートステイ先やデイサービスのドアへの移動であっても、そこを利用する時に会えるスタッフは、久しぶりに接する社会の代表的存在として立ち現われてくる。つまり、そのような場合にはこれまでとは違う「非日常」の場として介護現場が意味づけられる。緊張した面持ちで周りの様子を見まわしたり、落ち着かずにいる状況はむしろ、「刺激」として積極的な意味合いを見出すことも可能である。ショートステイという場は、「介護」を通して日常生活を支えていると同時に、「かりそめの生活の場」としての非日常的空間として二重の意味をもった場である。

註

- (1) 1999年4月29日、東京都墨田区の曳舟文化センターにおいて「日本民俗学会満50年記念事業公開シンポジウム〈老い〉—その豊かさを求めて」と題して公開シンポジウムを開催した。その時の発表などに基いて翌2000年に『老熟の力—豊かな〈老い〉を求めて』として刊行された。
- (2) 1980年代よりマスコミにより「呼び寄せ老人」と命名された、都市部に居住する子どものもとに呼び寄せられ同居を始める高齢者の姿がクローズアップされ始めたようだ。その現象については、都市問題や、介護の問題として、様々に研究が重ねられている [東川 1994; 水野・高崎 1998; 嵯峨座 1999; 大友 1999; 鈴木 1999; 松村 1999; 染谷 1999; 白石 1999; 川上 2001; 斎藤・甲斐 2005; 兎澤 2006; 伊藤 2008 など]。
- (3) 歴史学的新村拓によると、近代以降老人介護を動機づける教育の徹底がはかられるようになり、修身書などで「報恩」「孝養」を子や孫の当然の義務として介護への動機づけをしたり、「先祖祭祀をテコにした家族の情的結合と家族国家観の育成」に力点を置き介護の内面化をはかった。更には1932年施行の救護法により、居宅介護が原則であるがそれがかなわない人たちは養老院などへの「収容」が行われるようになり、「収容老人に対する世間の差別的まなざしを醸成させたことは、居宅介護を継続させることへの家族に対する大きなプレッシャーとなったとともに、社会保障費の支出を抑制させる効果があった」 [新村 1999: 95] として、「お上の世話になることを恥と捉える意識を育てたことは、家族機能の肩代わりを意味した社会保障費の支出を抑制させ、居宅介護の原則を長年にわたって維持させることになった」 [新村 1999: 97] としている。このように「家で見るもの」という観念は農村地帯などでは現在でも維持されており、そのような地域

における高齢者を介護サービスへとつなげることに苦心している事例が介護の研修会などでは数多く聞かれた。更に、三好春樹はそのような経験から「ムラの庄屋」などの存在をうまく活用し、ある地域における高齢者をサービス利用へとつなげた事例を挙げている。[三好 1997: 224]

- (4) 『老いて都市に暮らす—町田市高齢者の肉声を生かす—』[高齢者アンケートを読む会編 1995] は東京のベッドタウンとして急激に人口増加した町田市において 1990 年～1993 年までに行ったアンケート調査の「高齢者の声」の記録である。「呼び寄せ型」の人たち自身やその家族の声などもそのまま掲載されている。
- (5) 筆者は調査を兼ねて A にて週に 3 日の非常勤職員として勤務しながらの定点観察的参与観察ということをして 2008 年 10 月より約 1 年半実施してきた。そのため、時には介護現場におけるスタッフの一員としての葛藤も経験してきた。今回扱っている事例については、働く当初より施設長には事情を説明し、更に第一稿に目を通してもらい事例として採用することに承諾を得た。通常、ショートステイとは特別養護老人ホームや老人保健施設などの入居施設の敷床をショートステイ利用に備えて確保し充てることが多い。しかし、A は「ショートステイ」だけを行うための施設である点が他のショートステイとの違いであり、大きな特徴として挙げることが出来る。
- (6) ここで用いている「社縁」とは、米山俊直が『同時代の人類学』において述べている、「血や土の関係をかえたつながりに大きく依存している。(中略) このような第三のカテゴリーを、私は社縁と呼ぶ。社というのは会社、結社の社である。なにかの目的が機縁になってつくられたつながりをさすもの」[米山 1994: 116] つまり、血縁や地縁以外の関係の意で用いている。

文献

- 石川治江 2000 『介護はプロに、家族は愛を。』ユーリーグ
- 板井正斉 2001 「神道と福祉文化論—神島における老人観の現在—」『皇學館論叢』34 (2)
- 板橋春夫 2000 「長寿のあやかり—赤飯・長寿銭の習俗」宮田 登・森 謙二・網野房子編『老熟の力—豊かな〈老い〉を求めて』早稲田大学出版部
- 伊藤シヅ子 2008 「子どもの近くに転居してきた「呼び寄せ高齢者」に関する研究—聞き取り調査の事例から—」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』3
- 大井 玄 2008 『「痴呆老人」は何を見ているか』新潮社
- 大友 篤 1999 「高齢期における居住移動の形態」『都市問題』90 (12)
- 加藤悦子 2005 『介護殺人—司法福祉の視点から—』クレス出版
- 川上伊勢子 2001 「子どもの近くに転居し適応した高齢者の特性」『日本看護学会誌』10 (1)
- 倉石あつ子 2000 「嫁のつとめ—看護と看取り—」『フォーラム』18
- 高齢者アンケートを読む会編 1995 『老いて都市に暮らす—町田市高齢者の肉声を生かす—』亜紀書房
- 斎藤 民・甲斐一郎 2005 「高齢転居者の社会的孤立と介護予防」『公衆衛生』69 (9)
- 嵯峨座晴夫 1999 「高齢者の生活条件と居住環境」『都市問題』90 (12)
- 渋谷 研 2001 「その後の人たち—老人介護のフォークロア—」『国立歴史民俗博物館研究報告』91
- 清水浩昭 2000 「人口学的にみた高齢期家族の特徴」『シリーズ家族はいま…3—老いと家族：変貌する高齢者と家族』ミネルヴァ書房
- 白石真澄 1999 「ニュータウンにおける高齢化と居住課題」『都市問題』90 (12)
- 新村 拓 1999 「文化としての老人介護」青木 保ほか編『近代日本文化論 11—愛と苦難—』岩波書店
- 鈴木 晃 1999 「高齢者の住宅問題の一般化—二つの選択肢とその課題—」『都市問題』90 (12)
- 関沢まゆみ 1997 「宮座における年齢秩序と老いの意味の変化—奈良阪の老中の分析から—」『日本民

俗学』212

- 関沢まゆみ 2003『隠居と定年 老いの民俗学的考察』臨川書店
- 染谷侑子 1999「人口減少地域における高齢化と居住問題」『都市問題』90(12)
- 兎澤恵子 2006「高齢者の住居移動による自尊感情の実態調査—呼び寄せ高齢者と地元高齢者の比較—」『群馬パース大学紀要』3
- 比嘉政夫 2000「長寿社会・沖縄の文化的背景—長寿儀礼を中心に」宮田 登・森 謙二・網野房子編『老熟の力—豊かなく老い—を求めて』早稲田大学出版部
- 東川 薫 1994「都市部における高齢者の居住移動—「呼び寄せ」高齢者と都市指標」『自治時報』48(2)
- 増田光吉 1980「老親と子」那須宗一・上子武次編『家族病理の社会学』培風館
- 松崎憲三 2004「ポックリ(コロリ)信仰の諸相(二)—東海地方を事例として—」『日本常民文化紀要』24
- 松崎憲三 2007『ポックリ信仰 長寿と安楽往生祈願』慶友社
- 松村直道 1999「定住生活の変化と親子の近接住居」『都市問題』90(12)
- 水野敏子・高崎絹子 1998「子供の近くに転居してきた「呼び寄せ老人」に関する研究—「呼び寄せ」に対する介護者の認識とその関連要因の分析—」『老年看護学』3(1)
- 宮田 登ほか編 2000『老熟の力—豊かなく老い—を求めて』早稲田大学出版部
- 三好春樹 1997『関係障害論』雲母書房
- 米山俊直 1994『新版 同時代の人類学 21世紀への展望』日本放送出版協会
- A市 2009『A市高齢者福祉計画(案)』